

久世神社の西の街道は、国道二十四号線と国鉄奈良線の間を貫いている。

いま、この道にそって寺

田小学校前から長池へ、そ

して観音堂、中村、市辺、

多賀へと南へ歩いてみると、

この道は、山麓に沿って少

しずつ曲っていて、ゆるやかな坂道が多く、古い家並

などもあって、昔の街道筋

の姿をとどめている。

郡が大和南部から北部の

平城京に移る奈良時代にな

ると、中央集権の翼があが

り、咲く花の匂うが如く栄

えた奈良の都を中心に、地

方との往来が激しくなった。

交通制度も整備され、和

同四(七一)年には、山

背国(南山城)に岡田(木

津町)、山本(田辺町三

山木)の二都亭(おかれ

た。これは、木津川流域が

交通の要所を始めていたからで、に進み、多賀から市辺、中村、鷺坂」等たびたびうたわれ

ある。当時の官道は、並木や果 観音堂、長池、久世へ、そして

樹を植え、往来の旅人の休息を 久世から宇治、東宇治、山科、

便にし、水利等をはかったこと 近江を経て、北陸・東山街道に

が、「延喜式」に記されている。通じていた。

奈良時代に南山城を通る主要 この東山麓は、古墳の密度も

な幹線道路(官道)は、平城京 高いし、古くから渡来人の住み

奈良時代の街道

市史の窓 No.44



から木津川東岸を南北に結ぶ東 ついた所が多く、早くから「ム

国街道(大和街道)と、西岸を「ラ」も発達していた。低地は条

走る山陰街道であった。 里制が施行されたが未だ洪水も

この東国街道(平安京以後大 なく、人々は一部を除いて、あ

和街道)は、大和から奈良坂を まり住みついていた。あ

越えて木津にでて、木津川を渡 「万葉集」には、大和街道に

り、盆地東部丘陵地にそって北 そう「久世」「久背社」「久世

る。

この辺は、住宅地とな

って、昔の面影がみられな

いが、地形や宇治への距離

等から考察してみると、奈

良時代は、観音堂の北のあ

たりからいまの旧大和街道

の東方を通り、鷺坂越から

栗子山越(宇治市神明の山

をすして宇治に至っていたの

だろうか。